

令和五年度

神奈川県公立高等学校入学者選抜学力検査問題

共通選抜 全日制の課程

Ⅱ 国 語

注 意 事 項

- 1 開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 2 問題は問五までであり、1ページから14ページに印刷されています。
- 3 解答用紙の決められた欄に解答しなさい。
- 4 数字や文字などを記述して解答する場合は、解答欄からはみ出さないように、はつきり書き入れなさい。
- 5 マークシート方式により解答する場合は、選んだ番号の○の中を塗りつぶしなさい。
- 6 解答用紙にマス目(例：

--

)がある場合は、句読点などもそれぞれ一字と数え、必ず一マスに一字ずつ書きなさい。なお、行の最後のマス目には、文字と句読点などを一緒に置かず、句読点などは次の行の最初のマス目に書き入れなさい。
- 7 終了の合図があったら、すぐに解答をやめなさい。

受 検 番 号

番

問一 次の問いに答えなさい。

(ア) 次の a ～ d の各文中の——線をつけた漢字の読み方として最も適するものを、あとの 1 ～ 4 の中から一つずつ選び、その番号を答えなさい。

- a 物音が静寂を破る。 (1) じょうせい 2 せいじゃく 3 じょうせき 4 せいしゆく ()
- b 事態を収拾する。 (1) しゅうそく 2 しゅうしゃ 3 しゅうしゅう 4 しゅうごう ()
- c 試供品を頒布する。 (1) はんぷ 2 りょうふ 3 ぶんぷ 4 はいふ ()
- d 経済成長が著しい。 (1) おびただ 2 はなはだ 3 めまぐる 4 いちじる ()

(イ) 次の a ～ d の各文中の——線をつけたカタカナを漢字に表したとき、その漢字と同じ漢字を含むものを、あとの 1 ～ 4 の中から一つずつ選び、その番号を答えなさい。

- a 生物をケイトウごとに分類する。
 - 1 老舗のデントウを守る。 2 強豪校との対戦にトウシを燃やす。
 - 3 国会でトウシユが意見を述べる。 4 水をフットウさせる。
- b 書類にインカンを押す。
 - 1 会議でイッカンした方針を示す。 2 結果を聞いてカンセイをあげる。
 - 3 植物の名前をズカンで調べる。 4 洗った服をカンソウさせる。
- c 庭の花壇にキュウコンを植える。
 - 1 教室でキュウシヨクを配膳する。 2 感激のあまりゴウキュウする。
 - 3 犬には鋭いキュウカクがある。 4 大空をキキュウに乗って旅する。
- d 木彫りの像に細工をホドコす。
 - 1 学校でうさをシイクする。 2 自動車をセイゾウする。
 - 3 地質調査をジッシする。 4 建築の許可をシンセイする。

(ウ) 次の俳句を説明したものとして最も適するものを、あとの 1 ～ 4 の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

ものの芽のほぐれほぐるる朝寝かな

松本 たかし

- 1 朝寝をして日が高く昇ってから外へ出た自身の様子を「朝寝かな」と余韻を持たせて表し、昼間に活動を始めたことで春の日の光の温かさを植物とともに味わえた喜びを鮮明に描いている。
- 2 春の朝に植物の芽がほころぶ様子を「ほぐれほぐるる」と動きを重ねて表すことで、盛んに活動する植物と日が高くなるまで眠りの心地よさを味わっている自身の姿を対照的に描いている。
- 3 春に向けて庭に植えた多様な植物を「ものの芽」と表現して一般化することで、自身が朝寝をしている間にも土の中で発芽に向けて準備を進める植物の生命力の強さを印象深く描いている。
- 4 寒さの厳しい冬を乗り越えた植物がゆっくりと芽を伸ばしつつある様子を「朝寝」にたとえ、植物の動きから春の訪れを感じることで生じた自身の気持ちの高まりを情感豊かに描いている。

問二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

大学生の「僕」は、気象学の教授である「藤巻先生」から息子の家庭教師を頼まれ、中学生の「和也」に勉強を教えている。ある日、「僕」は藤巻家での夕食に招かれ、「藤巻先生」「奥さん（スミ）」「和也」と食事をするようになった。食事が進む中、「和也」が「藤巻先生」の研究に疑問を投げかけたことをきっかけに、雰囲気が一変した。「奥さん」がとりなしてくれたが、「和也」は納得できない様子で口を開いた。

「やっぱり、おれにはよくわかんないや。」

「わからないことだらけだよ、この世界は。」

先生がひとりごとのように言った。

「だからこそ、おもしろい。」

一時はどうなることかとほらはらしたけれど、それ以降は和也が父親につつかかることもなく、食事は和やかに進んだ。鰻をたいらげた後、デザートには西瓜が出た。

話していたのは主に、奥さんと和也だった。僕の学生生活についていくつか質問を受け、和也が幼かった時分の思い出話も聞いた。

中でも印象的だったのは、絵の話である。

朝起きたらまず空を観察するというのが、藤巻先生の長年の日課だという。晴れていれば庭に出て、雨の日には窓越しに、とっくりと眺める。そんな父親の姿に、幼い和也はおおいに好奇心をくすぐられたらしい。よちよち歩きで追いかけていつては、並んで空を見上げていたそうだった。熱視線の先に、なにかとてつもなくおもしろいものが浮かんでいるはずだと思ったのだろう。

「お父さんのまねをして、こう腰に手をあてて、あごをそらしてね。今にも後ろにひっくり返りそうで、見ているわたしはひやひやしちゃって。」

奥さんは身ぶりをまじえて説明した。本人は覚えていないようで、首をかしげている。

「それで、後で空の絵を描くんですよ。お父さんに見せるんだ、って言って。親ばかかもしれないですけど、けっこうな力作で……。そうだ、先生にも見ていただいたら？」

「親ばかだって。子どもの落書きだもん。」

照れくさげに首を振った和也の横から、藤巻先生も口添えした。

「いや、わたしもひさしぶりに見たいね。あれはなかなかたいたいのだよ。」

「へえ、お父さんがほめてくれるなんて、珍しいこともあるもんだね。」

冗談めかしてまぜ返しつつ、和也はまんざらでもなさそうに立ちあがった。

「あれ、どこにしまったっけ？」

「あなたの部屋じゃない？ 納戸か、書斎の押し入れかもね。」

奥さんも後ろからついていき、僕は先生とふたりで和室に残された。

「先週貸していただいた本、もうじき読み終わりそうです。週明けにでもお返しします。」

なにげなく切り出したところ、先生は目を輝かせた。

「あの超音波風速温度計は、実に画期的な発明だね。」

超音波風速温度計のもたらした貢献について、活用事例について、今後検討すべき改良点について、堰を切ったように語り出す。

お絵描き帳が見あたらなかったのか、和也たちはなかなか帰ってこなかった。その間に、先生の話は加速度をつけて盛りあがった。ようやく戻ってきたふたりが和室の入口で顔を見あわせているのを、僕は視界の端にとらえた。自分から水を向けた手前、話の腰を折るのもためらわれ、どうしたものかと弱っていると、スケッチブックを小脇に抱えた和也がこちらへずんずん近づいてきた。

「お父さん。」

² うん、と先生はおざなりな生返事をしたきり、見向きもしない。

「例の、南西諸島の海上観測でも役に立ったらしい。船体の揺れによる影響をどこまで補正できるかが課題だな。」

「ねえ、あなた。」

奥さんも困惑顔で呼びかけた。

と、先生がはっとしたように口をつぐんだ。僕は胸をなでおろした。たぶん奥さんも、それに和也も。

「ああ、シミ。悪いが、紙と鉛筆を持ってきてくれるかい。」

先生は言った。和也が踵を返し、無言で部屋を出ていった。

おろおろしている奥さんにかわって、自室にひっこんでしまった和也を呼びにく役目を僕が引き受けたのは、少なからず責任を感じたからだ。³

父親に絵をほめられたときに和也が浮かべた表情を、僕は見逃していなかった。雲間から一条の光が差すような、笑顔だった。いつだって陽気で快活で、いっそ軽薄な感じさえする子だけれど、あんな笑みはじめて見た。

「花火をしよう。」

ドアを開けた和也に、僕は言った。

「おれはいい。先生がつきあつてあげれば？ そのほうが親父も喜ぶんじゃない？」

和也はけだるげに首を振った。険しい目つきも、ふてくされたような皮肉っぽい口ぶりも、ふだんの和也らしくない。僕は部屋に入り、後ろ手にドアを閉めた。

「まあ、そうかつかするなよ。」

藤巻先生に悪気はない。話に夢中になって、他のことをつかのま忘れてしまっただけで、息子を傷つけるつもりはさらさらなかったに違いない。「様子を見てきます。」と僕が席を立ったときも、なにが起きたのか腑に落ちない様子できょとんとしていた。

「別にしない。」

和也は投げやりに言い捨てる。

「昔から知ってるもの。あのひとは、おれのことなんか興味がない。」

腕組みして壁にもたれ、暗い目つきで僕を見据えた。

「でも、おれも先生みたいに頭がよかったら、違ったのかな。」

「え？」

⁴ 「親父があんなに楽しそうにしてるの、はじめて見たよ。いつも家ではたいくつなんだろうね。おれたちがじゃ話し相手になれないもんね。」

うつむいた和也を、僕はまじまじと見た。

「どうせ、おれはばかだから。親父にはついていけないよ。さっきの話じゃないけど、なにを考えてるんだか、おれにはちっともわかんない。」

僕は小さく息を吸って、口を開いた。

「僕にもわからないよ。きみのお父さんが、なにを考えているのか。」

和也が探るように目をすがめた。僕は机に放り出されたスケッチブックを手にとった。

「僕が家庭教師を頼まれたとき、なんて言われたと思う？」

和也は答えない。身じろぎもしない。

「学校の成績をそう気にすることもないんじゃないか、ってお父さんはおっしゃった。得意なことを好きにやらせるほうが、本人のためになるだろうってね。」

色あせた表紙をめくってみる。ページ全体が青いクレヨンで丹念に塗りつぶされている。白いさざ波のような模様は、巻積雲けんせきうんだろう。

「よく覚えてるよ。意外だったから。」

次のページも、そのまた次も、空の絵だった。一枚ごとに、空の色も雲のかたちも違う。確かに力作ぞろいだ。

「藤巻先生はとても熱心な研究者だ。もしも僕だったら、息子も自分と同じように、学問の道に進ませようとするだろうね。本人が望もうが、望むまいが。」

僕は手をとめた。開いたページには、今季節におなじみのもくもくと不穏にふくらんだ積雲が、繊細な陰翳いんえいまでつけて描かれている。

⁵「わからないひとだよ、きみのお父さんは。」

わからないことだらけだよ、この世界は——まさに先ほど先生自身が口にした言葉を、僕は思い返していた。

だからこそ、おもしろい。

僕と和也が和室に戻ると、先生は庭に下りていた。どこからかホースをひっぱってきて、足もとのバケツに水をためている。

奥さんが玄関から靴を持ってきてくれて、僕たち三人も庭に出た。

縁側に、手持ち花火が数十本も、ずらりと横一列に並べてある。長いものから短いものへときれいに背の順になっていて、誰がやったか一目瞭然だ。色とりどりの花火に、目移りしてしまう。

どれにしようか迷っていたら、先生が横からすいと腕を伸ばした。向かって左端の、最も長い四本をすばやくつかみ、皆に一本ずつ手渡す。

「花火奉行なんだ。」

和也が僕に耳打ちした。

花火を配り終えた先生はいそいそと庭の真ん中まで歩いて行って、手もとに残った一本に火をつけた。先端から、青い炎が勢いよく噴き出す。和也も父親を追って隣に並んだ。ぱちぱちと燃えさかる花火の先に、慎重な手つきで自分の花火を近づける。火が移り、光と音が倍になる。

僕と奥さんも火をもらった。四本の花火で、真っ暗だった庭がほのかに明るんでいる。昼間はあんなに暑かったのに、夜風はめっきり涼しい。虫がさかんに鳴いている。

ゆるやかな放物線を描いて、火花が地面に降り注ぐ。軽やかにはじける光を神妙に見つめる父と息子の横顔は、よく似ている。

(瀧羽 麻子「博士の長靴」から。一部表記を改めたところがある。)

(ア) — 線1 「和也はまんざらでもなさそうに立ちあがった。」とあるが、そのときの「和也」を説明したもとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 幼い頃に描いた空の絵に対して毎朝空を観察している父親が賞賛の言葉を口にしたことで、絵の出来映えを確信して気持ちが舞いあがり、喜びのままに絵を持ってこようとしている。

2 幼い頃に毎朝絵を描いていたことを父親から評価されてうれしくなったものの、親にはめられて喜ぶ姿を「僕」に見せるのが恥ずかしく、慌てた様子で居場所を変えようとしている。

3 幼い頃に描いた絵の素晴らしさを自覚してはいるものの、父親の前で「僕」にほめられることを想像すると照れくさくなり、不真面目な発言をしてその場から離れようとしている。

4 幼い頃に描いた絵をほめてくれた父親に対して素直に喜びを表すことに抵抗を感じ、気持ちをこまかすような発言をしつつも、うれしさをにじませて絵をとりこうとしている。

(イ) — 線2 「うん、と先生はおざなりな生返事をしたきり、見向きもしない。」とあるが、そのときの「藤巻先生」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 研究の話をしている最中に、状況を理解しないで絵のことを話しかけてくる「和也」に対して、戒めのためにあえて冷たく振る舞っている。

2 芸術に関しては詳しくなく、絵に対して適切な評価ができないため、「和也」の呼びかけに気づかないふりをして話を続けようとしている。

3 「和也」の呼びかけに応じて絵を見ると、客が始めた話を中断することになると気づき、話が終わるまで待つようにと態度で示している。

4 研究に関係のある話をしているうちに、研究についての思考に没頭してしまい、「和也」の絵のことに対して意識が向かなくなっている。

(ウ) — 線3 「自室にひっこんでしまった和也を呼びにいく役目を僕が引き受けたのは、少なからず責任を感じたからだ。」とあるが、そのときの「僕」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 絵に関するやりとりの際に「和也」の気持ちが明るくなったと気づいていながら、「藤巻先生」に絵とは関係ない話をして結果的に「和也」を落胆させてしまったため、何とかしたいと思っている。

2 父親に見せるために「和也」が必死になって絵を探していることがわかっていながら、「藤巻先生」の話聞くことに夢中で結局「和也」を手伝うことができなかつたため、申し訳ないと思っている。

3 「和也」が幼い頃の話がされて嫌がっていることを察していながら、「藤巻先生」が思い出話で盛りあがっていくのをとめられず結局「和也」を怒らせてしまったため、機嫌をとろうと思っている。

4 「和也」が絵をきっかけに父親と将来の話をしたかと思っっていることを知っっているながら、「藤巻先生」の話の話を中断できず結果的に「和也」の気持ちを踏みにじってしまったため、心苦しく思っている。

(エ) —線4「親父があんなに楽しそうにしているの、はじめて見たよ。」とあるが、そのように言ったときの「和也」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 父親に向かって「僕」が熱く語る姿に憧れを感じつつも、「僕」のように自信を持って取り組めることのない自分が、父親の前で堂々と振る舞えるはずがないと投げやりになっている。

2 「僕」が父親から優秀な研究者として認められていることを感じとり、「僕」と違って勉強が得意ではない自分が、父親の期待に応えて研究者になれるのかどうか不安に思っている。

3 「僕」と一緒に過ごす中で自分の知らない父親の一面が現れたのを見て、「僕」と違って研究に関する話題を共有できず、父親から関心を示してもらえない自分に無力さを感じている。

4 口数の少ない父親が「僕」と一緒にいるときはよく話すということに気づき、「僕」のように話を聞くことに徹すれば、自分も父親とうまく関係を築けるのではないかと期待している。

(オ) —線5「わからないひとだよ、きみのお父さんは。」とあるが、ここでの「僕」の気持ちをふまえて、この部分を朗読するとき、どのように読むのがよいか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 息子には得意なことをしてほしいという「藤巻先生」の考えを理解していながらも、まずは目の前にいる「和也」を慰めようと思いい、わかっている様子によそおっているように読む。

2 熱心な研究者でありながら息子に後を継ぐことを強制しない「藤巻先生」は、自分たちの理解を超えた存在であるということ、「和也」だけでなく自分にも言い聞かせているように読む。

3 「藤巻先生」が学校の成績を気にすることはないといいながらも家庭教師を依頼したのは、息子に仕事を継がせたいと思っているからだとすることを、「和也」に訴えかけるように読む。

4 「藤巻先生」の話し相手になっている自分に対し、父親のことを理解できているに違いないと決めてつけてくる「和也」の態度に圧倒され、自分も理解できていないと打ち明けるように読む。

(カ) この文章について述べたものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「藤巻先生」と「和也」がすれ違いながらも親子として互いを思っている様子を、夏のひとときを両者ととも過ぎさせた「僕」の視点から描いている。

2 父親に反抗的な「和也」の態度に戸惑いつつも将来のことを「和也」に考えさせようとする「僕」の姿を、多くの擬態語や慣用句を用いて描いている。

3 「僕」と関わる中で誤解に気づいた「藤巻先生」と「和也」が互いを許し歩み寄っていく様子を、親子同士の短い言葉のやりとりによって描いている。

4 父親と関わる「僕」を見たことで研究者になることを決意する「和也」の姿を、幼い頃に描いていた絵にまつわる「和也」の回想をまじえて描いている。

問三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

私たちの多くは自分のまなざしが固定化しているとは思っていない。自分は人と比べて柔軟な視点を^I持っており、頑固なまなざしを持っているのは相手だと思っている。自分は他者の意見を受け入れ、その違いにも寛容で、自由に発想を変えられると信じている。だから普段、私たちは自分の見方を変えたいと思っていない。

A 柔軟でない相手や融通の利かない物事を変えたいと思っている。

¹ 私たちが見方を変えるのは、自分にとって都合の悪いことが起こったときだ。社会や他者や物事との関係の中で自分にとって不都合な状況が生じたときに、私たちはそれを何とか切り抜けるために見方を変えようとする。アイデアに行き詰まったとき、人間関係がうまくいかないとき、日々の生活で困ったことが生じたとき。そしてその物事がどうにも変えられないとき、経験や知識の範囲で私たちは見方を変えようとする。だがその場合に私たちが変えるのは自分自身への認識ではなく、表面的な物事の解釈であることが多い。

物事の解釈を変えることも見方を変えることではあるのだが、それは自分の欲求に合わせ、都合よく見方を変える場合が多い。そこでの見方を方向づける欲求そのものは自分の深い部分で固定化しており、それには気づかない。私たちは物事の解釈を変更することで、日常の問題であれば何とか乗り切れるかもしれない。だが、深刻な事態が起こったときには、それだけではうまくいかなくなる。生死にまつわるようなこと、自分のアイデンティティの危機、混乱した状況や先行きの全く見えない社会不安。そんな場合に私たちは根本的な見方を変える必要性に迫られる。

そもそも、見方を変えるのはそう簡単なことではない。これまで長い時間をかけて培ってきた自分の根幹に関わることほど、見方を急に変えるのは難しい。それにはとてもエネルギーと努力が必要になるのだ。特に社会に大きな変化が訪れるときや、答えのない深刻な問いが自分に突きつけられ、根本から見方を変えねばならない状況になるほど、私たちはこれまで以上にますます自分のまなざしを固定しがちだ。自分の見方が間違っていると改めるよりも、自分の見方は間違っていないことを確認する方向に物事の解釈を変更する方が私たちには容易い。

しかし、何とかしてようやく自分の認識を変えることができたとしても、また次から次へと深刻な事態が続くような状況に陥るとどうだろうか。今度は、私たちは自ら進んでまなざしを固定化することを選ぶのである。答えが定まらない不安定な状態は、私たちに大きな苦痛を強いる。その不安の激流に流されてしまわないように、何か答えを決めてそこから動きたくない気持ちが強まるのだ。だから状況が厳しくなるほど、自分の都合の悪いものは視界から追いやって、自分が見たい部分や一度信じたことだけに目を向けがちになる。そんな状態を繰り返しているうちに、² 私たちのまなざしはもう変えられないほど固定化してしまふ。

こうして一度信じ込んでしまうと、その物事の別の側面を見せられても、私たちにはそれが事実には見えない。いくら妥当性がある理屈が並べられても、自分の信念に合わないものを間違っているとすると、私たちには容易い。自分の見方を正当化してくれる情報や理屈、権威を追い求めるようになると、それがまた自分の見方をますます強めていく。

B 次第に自分と反対の見解や立場を突きつける相手を敵視したり、見下したりする態度を示すようになる。

小さい頃から教育されてきた知識、長年にわたって社会で信じられてきた概念、多くの人が口にする情報。それらは繰り返し唱えられるものほど私たちの中に強く刻まれ、それはいつしか自分自身の信念や考え、感覚として自分の無意識に深く入り込んでいく。自らが固く信じて疑わない見方、つまり私たちのま

なぞしが固定化した状態は「固定観念」あるいは「偏見」と言い換えられる。それが社会にまで広がったものを、私たちは「常識」と呼ぶ。だが、^(注)アインシュタインも常識とは十八歳までに身につけた偏見のコレクションと指摘したと言われるように、常識とはまなざしが固定化したものにほかならない。

³ そんな常識を前提にして、社会ではさまざまなことが動いている。政府の政策、経済の変動、科学の通説、それにもとづいた産業、そして日々の生活。それらはそれぞれ個人の信念だけでなく多くの人々の常識と利害が関係している。だからこれまでの常識とされるものが根本的に覆^{くつがえ}されることが起こると、それに抵抗する力はより大きくなる。

何か前提を変えてしまうような世紀の発見があったり、根本から産業構造を覆す新しい発明が起こったようなときでも同様である。それによってこれまでの常識のもとで積み上げてきた莫大^{ばくだい}な利益が失われるのであれば、社会は保守的な態度をとるだろう。全ての常識やシステム、教科書や方程式を根本からつくりかえねばならないのであれば、総力を上げてそれをなかつたことにしようとするかもしれない。

⁴ 危機に際しても同じことが言える。世界的な危機や混乱を生み出す前提が、もし何らかの理由で間違っており、それが次の常識を生み出してしまったとすれば。その前提をつくることに関与し積極的に吹聴^{ふいちょう}してきた人々、例えば専門家や権威、政治家や企業などにとっては、とても不都合なことになる。あるいはその常識にもとづいて社会的に拳を振り上げ、声高に正当性を主張していた人々は拳を下ろす先を失ってしまふ。だからもし自分の主張が間違いであつたことに気づいたとしても、これまで前提にしてきた見方を変えるにはとても勇気が必要になる。

それに社会がその者たちに責任を負わせようとすればするほど、素直に見方を変えるどころか都合の悪い事実が表に出ることを隠蔽^{かくぺい}し、歪曲^{わいきよく}し、演出^{えんしゅつ}しようとするだろう。あるいは、反感を寄せる社会のほとぼりが冷めるのを待ち、これまでの責任を回避しようとするかもしれない。いずれにせよ、自らの常識を根本的に変えるよりも、物事や出来事、事実の解釈を変えることを選択しがちである。

だから混乱が大きくなればなるほど、⁵ 社会では次の常識を巡る「まなざしの戦い」が始まる。そこには、さまざまな力が巧みに私たちのまなざしをデザインしようと仕掛けており、どの見方もそれらしく見えるように^(注)プレゼンテーションされる。そんな観点からインターネットを注意深く眺めると、多様な見方が並べられていることに気づくだろう。

その中には科学的でないものも溢^{あふ}れているし、客観性を装^{よそお}いながら根拠のなさそうなものもたくさん見られる。しかし私たちがこれまで当たり前としてきた社会の仕組みや科学的な常識を覆すような情報や証拠も共有され始めているのだ。それらの全てが妥当性を欠いた説明であるとは必ずしも言い切れないように思える。一方で、あまりにもたくさんさんの情報に溢れ、そのどれもが正反対を主張する中、今や何が事実で何が正解なのかの判断は簡単には下せなくなっている。そんなときこそ、改めてもう一度、「常識とは何か」について確認する必要があるだろう。

常識とは何かを改めて考えることは日常の中でそれほど多くはない。人は誰も自分の常識は正しいと思っている。そして他の人々も自分と同じような常識を持ち、同時に自分も他の多くの人と同じように常識を備えていると考えてしまふ。だが私たちが考えている以上に常識とは曖昧で実体のないものである。

(ハナムラ チカヒロ「まなざしの革命」から。一部表記を改めたところがある。)

(注) アイデンティティと他と区別する自分らしさ。

アインシュタインとドイツイ生まれの理論物理学者(一八七九―一九五五)。

プレゼンテーション提示すること。

(ア) 本文中の **A**・**B** に入れる語の組み合わせとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- | | | | |
|---------|-------|---------|-------|
| 1 A 例えば | B ただし | 2 A しかし | B または |
| 3 A むしろ | B そして | 4 A やはり | B つまり |

(イ) 本文中の~~~~線Ⅰの語と同じ熟語の構成になっている語を、次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- | | | | |
|------|------|------|------|
| 1 携帯 | 2 名言 | 3 送迎 | 4 尽力 |
|------|------|------|------|

(ウ) 本文中の~~~~線Ⅱの「よう」と同じ意味で用いられている「よう」を含む文を、次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- | | |
|------------------|--------------------|
| 1 妹はすでに出かけようだ。 | 2 明日は早く起きようと思っている。 |
| 3 週末は一緒に映画を見ようよ。 | 4 雨が滝のように降っている。 |

(エ) ——線1「私たちが見方を変えるのは、自分にとって都合の悪いことが起こったときだ。」とあるが、そのことについて筆者はどのような考えを述べているか。それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 都合なことが起きた場合には、自身の個人的な欲求で都合よく物事を捉えるのではなく、世間において大多数の人が持っている認識に従おうとする傾向が強い。
- 2 都合の悪いことが生じたときには、自身の認識にこだわるのではなく、他者の意見や新しい知識を積極的に取り入れることで発想の転換をしようとする傾向が強い。
- 3 都合なことが生じたときには、新たな見識を身につけて自身の認識を変えるのではなく、直面している物事を自身が受け止められるように捉え直す場合が多い。
- 4 都合の悪いことが起きた場合には、自身が長い時間をかけて身につけた認識を改めるのではなく、問題を生じさせている相手に意見を変えるよう求めることが多い。

(オ) ——線2「私たちのまなざしはもう変えられないほど固定化してしまう。」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 深刻な事態の連続を解消するために新たな答えをつくり出すことが求められる中で、失敗を恐れるあまり一度成功した解決法にこだわってしまい、別の見方ができなくなっていくということ。
- 2 深刻な事態の連続で答えが定まらない状況から逃れようとして、自身にとって都合のいい側面だけに注目することを繰り返すうちに、自身の見方を改めることができなくなっていくということ。
- 3 深刻な事態が続いて誰も対応できないという状況に陥ると、自身の信念を揺るぎないものにして社会に貢献しなければならぬという使命感が働いて、見方が動かせなくなっていくということ。
- 4 深刻な事態が続いて他人を信用することができなくなり、自分以外に頼れる人はいないという意識が強まった結果、徐々に自身の見方を絶対的なものとして捉えるようになっていくということ。

(カ) ——線3「そんな常識」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 一度も教わったことがないにもかかわらず、全ての人間が生まれつき持っている同じような考え。
- 2 さまざまな時代を経て受け継がれていく中で、人々が何度も正確性を検証してでき上がったもの。
- 3 幼い頃から多くの人と触れ合い多様な経験をすることによって身につく、人によって異なる考え。
- 4 無意識のうちに自身の考えのものになっている、長い間人々の共通認識として扱われてきたもの。

(キ) —線4「危機に際しても同じことが言える。」とあるが、それを説明したのとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 危機の前提となつている常識が覆りそうになると、常識を根拠に正当性を主張していた人々が政治家の責任を追及しようとするかもしれないということ。
- 2 危機の前提となつている常識が根本から変わりそうになると、新たな発見や発明をすることで常識を守ろうとする人が出てくるかもしれないということ。
- 3 危機の前提となつている常識が覆りそうになると、常識が変わることによって不利益を被る人々が不都合な事実を隠そうとするかもしれないということ。
- 4 危機の前提となつている常識が根本から変わりそうになると、常識をもとに進められてきた政策に社会全体が関心を示さなくなるかもしれないということ。

(ク) —線5「社会では次の常識を巡る『まなざしの戦い』が始まる。」とあるが、「まなざしの戦い」に関して筆者はどのような考えを述べているか。それを説明したのとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 物事の解釈に影響を及ぼすような情報が提示され、中には常識を覆すようなものもあるが、異なる主張にもとづいた膨大な数の情報が入り乱れているため、適切な選択をするのは困難である。
 - 2 物事の解釈を揺るがそうとしてさまざまな情報が示されるが、中には根拠のないようなものも混じっているため、専門的な知識を駆使して検証しない限り、正解を探し出すのは困難である。
 - 3 物事の解釈に影響を与えることを目的として情報が提示されるが、常識が通用しないような情報も存在しているため、複数の観点から捉え直さない限り、妥当性を判断するのは困難である。
 - 4 物事の解釈を揺るがすような情報が提示され、多くの情報がそれらしく見えるようにつくられてはいるが、実体は非科学的で根拠のないものであるため、正確なものを選ぶのは困難である。
- (ケ) 本文について説明したのとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。
- 1 常識と見方が強く結びついていることを指摘するとともに、社会で常識が果たす役割について確認し、見方を変化させるためには常識を活用することが有効だと論じている。
 - 2 見方の固定化が起る経緯を述べた上で常識について説明し、多様な見方が生み出されている現代において、常識に対する自身の見方を振り返ることの必要性を論じている。
 - 3 社会に影響を与えている見方が常識によって固定化されたものであることを明らかにし、見方を変化させることの利点を説明しながら、情報発信の際の留意点も論じている。
 - 4 見方と解釈の違いを明確にしながら長年社会で常識とされてきた見方に疑問を投げかけ、常識にとられず、自身の見方を強固なものにしていくことが重要だと論じている。

問四 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

高倉天皇は、幼くして帝位に就いた。

去ぬる承安の頃ほひ、御在位のはじめつかた、御年十歳ばかりにもならせたまひけん、あまりに紅

葉を愛せさせたまひて、北の陣に小山を築かせ、櫓、楓の色美しうもみちたるを植ゑさせて、紅葉の山と

名づけて、終日に叡覧あるになほ飽き足らせたまはず。

しかるを、ある夜、野分はしたなう吹いて、紅葉みな吹き散らし、落葉すこぶる狼藉なり。殿守の伴の

みやづこ、朝清めすとてこれごとごとく掃き捨ててんげり。残れる枝、散れる木の葉をかき集めて、風

すさまじかりける朝なれば、縫殿の陣にて、酒あたたためてたべける薪にこそしてんげれ。奉行の蔵人、

行幸より先にと急ぎ行いて見るに、跡かたなし。「いかに。」と問へばしかしかと言ふ。蔵人、大きに驚き、

「あなあさまし。君のさしも執し思しめされつる紅葉を、かやうにしけるあさましきよ。知らず、汝等、

只今、禁獄流罪にも及び、わが身もいかなる逆鱗にか預からんずらん。」と嘆くところに、主上、いとど

しく夜のおとどを出でさせたまひもあへず、かしこへ行幸なつて紅葉を叡覧なるに、なかりければ、「い

かに。」と御尋ねあるに、蔵人奏すべき方はなし。ありのままに奏聞す。天気ことに御心良げにうち笑ま

せたまひて、「林間煖酒焼紅葉」といふ詩の心をば、それらには誰が教へけるぞや。やさしうも仕りける

ものかな。」とて、かへつて叡感に預かつし上は、あへて勅勘なかりけり。

〔平家物語〕から。

(注) 承安 平安時代の年号。一一七一―一一七五年。

北の陣 天皇の住まいの北側にある門。「縫殿の陣」ともいう。

殿守の伴のみやづこ 天皇の住まいで、庭の掃除などをする人。

蔵人 天皇の近くで仕える人。

行幸 ここでは、天皇が来ること。

天気 天皇の機嫌。

林間煖酒焼紅葉 書き下し文では「林間に酒を煖めて紅葉を焼く」と書く。中国の詩人、白居易

の詩の一節。

勅勘 天皇が罪を責めること。

(ア) —線1「終日に叡覧あるになほ飽き足らせたまはず。」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 高倉天皇は、小山の紅葉を一日中独り占めするのはもったいないと思い、多くの人たちと一緒に紅葉を眺めているということ。

2 高倉天皇は、小山に木を植えさせただけでは満足できず、紅葉が美しい他の山へ出かけて一日中紅葉を眺めているということ。

3 高倉天皇は、小山の紅葉を一日中眺めているうちに物足りなく感じ始め、紅葉している木を増やそうとしているということ。

4 高倉天皇は、小山に植えさせた紅葉を一日中眺めていてもまだ眺め足りないと思うほど、紅葉に夢中になっているということ。

(イ) —線2「蔵人、大きに驚き」とあるが、その理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 紅葉した木は暴風で葉が散らされたことで観賞に向かなくなってしまったが、「殿守の伴のみやづこ」が機転をきかせ、高倉天皇が暖をとるための薪として枝や葉を役立てたから。

2 暴風が吹いて散らばった紅葉を「殿守の伴のみやづこ」が片づけ、残っている枝なども酒をあたためるために燃やしてしまった結果、高倉天皇が見る紅葉がなくなってしまったから。

3 見頃を迎えた紅葉が暴風によって散らされてしまったことに「殿守の伴のみやづこ」がいち早く気づき、紅葉の様子を見た高倉天皇が悲しむことのないよう、燃やして片づけたから。

4 酔っ払った「殿守の伴のみやづこ」が紅葉の山に無断で立ち入り、酒をあたたためようとして散り落ちた葉に火をつけたことで、高倉天皇が植えさせた紅葉まで燃やしてしまったから。

(ウ) —線3「それらには誰が教へけるぞや。」とあるが、そのように言ったときの高倉天皇を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「林間煖酒焼紅葉」という詩の一節を「殿守の伴のみやづこ」がうまい具合に再現したのを見て、立場に合わない振る舞いをしたものだからかっている。

2 自分を喜ばせようとした「殿守の伴のみやづこ」が「林間煖酒焼紅葉」という詩の一節をひそかに学んでいたということがわかり、心を動かされている。

3 「殿守の伴のみやづこ」の行動を「林間煖酒焼紅葉」という詩の一節と照らし合わせることで趣のある振る舞いとして捉え、感心した態度を示している。

4 ずっと前に自分が教えた「林間煖酒焼紅葉」という詩の一節を「殿守の伴のみやづこ」が覚えており、見事に詩の場面を再現してみせたことに驚いている。

(エ) 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 目覚めてすぐに紅葉の様子を見に来た高倉天皇は、処罰されることを「蔵人」が恐れる中で「殿守の伴のみやづこ」の行動を褒め、誰にも罰を与えることはなかった。

2 気分良く目覚めた高倉天皇は、「蔵人」の心配をよそに紅葉の様子を受け入れ、「殿守の伴のみやづこ」の働きによって新たな楽しみ方に気がついたことを喜んだ。

3 いつもより早く目覚めた高倉天皇は、紅葉の様子を見ただけで何が起きたかを把握して「殿守の伴のみやづこ」の行動を許し、「蔵人」に事情を尋ねることはなかった。

4 紅葉の様子を心配して早く起きた高倉天皇は、言い訳ばかりする「蔵人」にあきれ、事情をありのままに報告した「殿守の伴のみやづこ」の正直さを高く評価した。

問五 中学生のAさん、Bさん、Cさん、Dさんの四人のグループは、「総合的な学習の時間」で人間と自然の共生について調べ、話し合いをしている。次の資料、グラフ1、グラフ2と文章は、そのときのものである。これらについてあとの問いに答えなさい。

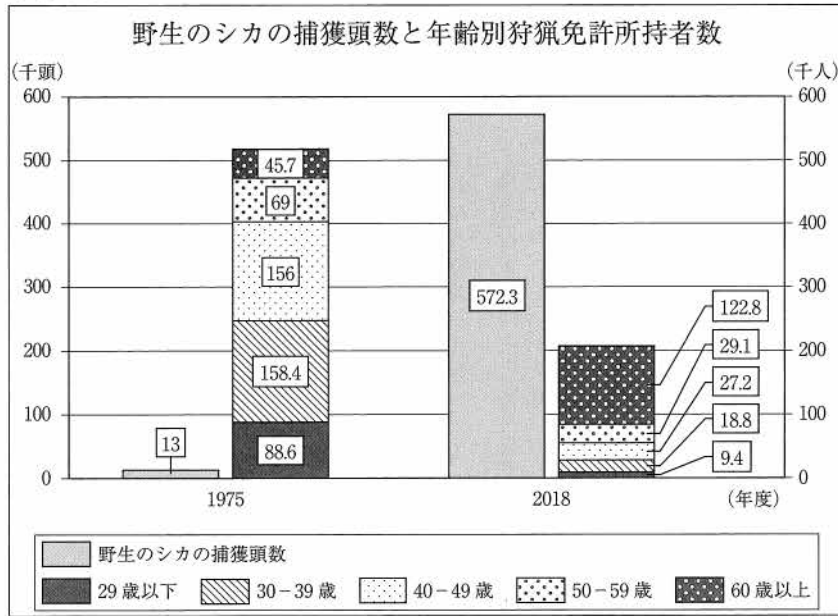
日本人は、古くから森を利用してきました。やがて森を加工し、水田や畑などの農耕地や居住のための開放空間を確保するようになり、その周りに自らの手で森を作り、奥山（自然林）、雑木林、里地という異なる生態系がつながりを持つ里山を作り上げてきました。

日本人は自然に手を加え、それを持続的に管理することで、自然との共生社会を完成させて、実に縄文の時代から一万年もの間、この狭い島国の中だけで完結して生きてきたとされます。

資料

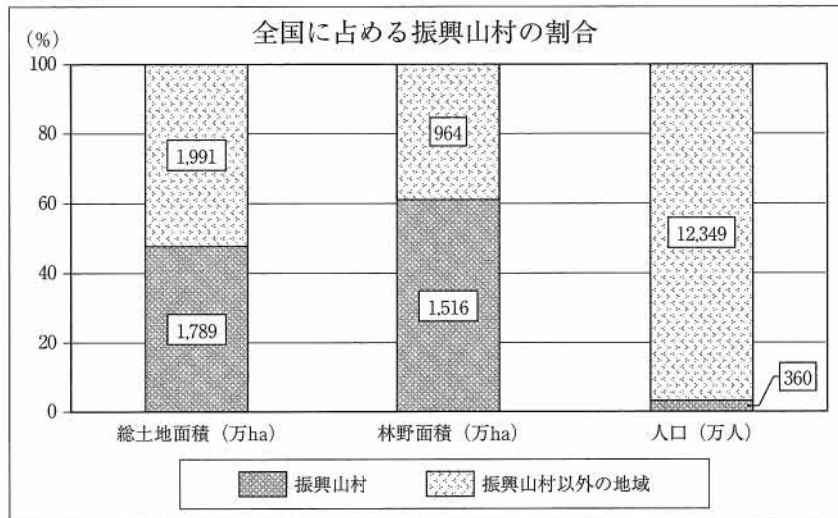
（五箇 公一）「これからの時代を生き抜くための生物学入門」から。一部表記を改めたところがある。

グラフ1



環境省ホームページ「野生鳥獣の保護及び管理」より作成。

グラフ2



林野庁「令和2年版 森林・林業白書」より作成。

Aさん

私たちは、人間と自然の共生について調べてきました。今日は、日本に住む私たちがこれからどのように自然と関わっていくのかについて、それぞれが調べてきたことをもとに考えましょう。

Bさん

まずは、資料を見てください。日本人が森を利用して生きてきたことが書かれています。日本人は、森に手を加えて作った雑木林から木を切り出して薪や炭にしたり、里地で農耕をしたりしながら、手つかずの自然林である奥山ともつながりを持って生活してきました。

Cさん

人間は、それらの総体である里山という場で自然と関わってきたのですね。自然との関わりの中で、現在ではどのようなことが問題になっているのでしょうか。

Dさん

では、グラフ1を見てください。これは、野生のシカの捕獲頭数と年齢別の狩猟免許所持者数をまとめたものです。これを見ると ことがわかります。

Cさん

野生のシカはどのような目的で捕獲されているのですか。

Dさん

野生のシカは人間の生活への被害を防ぐ目的で捕獲されることが多くなっています。シカに限らず、野生動物によって、農作物や希少な植物の食害、地表の植物が食い荒らされることによる土壌流出、自動車や鉄道車両との接触事故などが起こっており、深刻な状況です。

Aさん

野生動物との関係一つ取ってみても、現在では自然との共生がうまくできていないことがわかります。ここで、人間が自然と共生していく上で必要なことについて考えてみましょう。

Bさん では、もう一度資料を見て下さい。日本人は自然に手を加えるだけでなく、それを持続的に管理することで自然との共生社会を完成させたと書かれています。一度自然に手を加えて雑木林や農耕地にしたら、管理し続ける必要があるのですね。現状はどうなっているのでしょうか。

Cさん それについて、グラフ2を見ながら考えていきましょう。これは平成二十七年時点の全国に占める振興山村の割合を示したものです。産業の活性化や交通などの生活環境の整備が求められている振興山村では、自然に手を加えて雑木林や農耕地として利用してきました。

Dさん まさに里山と同様の暮らしが営まれているのですね。グラフ2を見ると、日本の林野面積の約六十パーセントが振興山村にあるのに比べて、振興山村の人口は日本の人口の約三パーセントしかないことがわかります。林野と関わりながら暮らす人がとても少ないことが気になりますね。

Cさん そうですね。そのことは、石油やガスが燃料として主流になって薪や炭を使用する機会が減ったことと関係していて、結果として放棄される雑木林が増えています。雑木林だけでなく、農耕地も放棄されるところが増え、再生利用が困難なほど荒廃してしまったりもありません。

Bさん なるほど。日本では、林野と関わりながら暮らす人が少ないために、雑木林や農耕地として使われていたところが放棄されているのですね。

Dさん このような現状もあって野生動物の活動範囲が広がり、シカなどが奥山から人間の生活しているところに出てきてしまうということが起こっているのかもしれませんが。

Aさん では、ここまでの話をまとめていきましょう。資料とグラフ2から読み取ったことをもとに、日本における人間と自然の共生という視点で考えると、 ことが必要です。

Bさん そうですね。ただし、人間の生活が変わってしまった以上は、そのことに加えてAIやロボットなどの科学技術を活用し、自然との共生に向けて何か新たな取り組みを始めることも必要ですね。

Aさん 次回は、振興山村の活性化のために実際に行われている取り組みについて調べてみましょう。

- (ア) 本文中の に入れるものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。
- 1 二〇一八年度は二十九歳以下の狩猟免許所持者数が一九七五年度のおよそ十倍に増えており、野生のシカの捕獲頭数も増えている
 - 2 一九七五年度は狩猟免許所持者数のうち三十歳代が最も多かった一方で、野生のシカの捕獲頭数は二〇一八年度のおよそ十分の一であった
 - 3 一九七五年度は狩猟免許所持者の総数が二〇一八年度のおよそ四倍だったが、野生のシカの捕獲頭数は二〇一八年度より大幅に少なかった
 - 4 二〇一八年度は狩猟免許所持者の総数が一九七五年度の半数以下となり平均年齢が高くなっているが、野生のシカの捕獲頭数は増えている

(イ) 本文中の に適する「Aさん」のことは、次の①～④の条件を満たして書きなさい。

- ① 書き出しの日本における人間と自然の共生という視点で考えると、という語句に続けて書き、文末のことが必要です。という語句につながる一文となるように書くこと。
- ② 書き出しと文末の語句の間の文字数が二十五字以上三十五字以内となるように書くこと。
- ③ 資料とグラフ2からそれぞれ読み取った内容に触れていること。
- ④ 「管理」「林野」という二つの語句を、どちらもそのまま用いること。

(問題は、これで終わりです。)

